

デジタルネイティブと教育

佐々木 隆

プロローグ

拙著『デジタルネイティブ』とは何か（二〇一四）で、デジタル時代に生まれたからと言って必ずしもデジタル機器やインターネットを巧みに使いこなせていない状態について取り上げた。デジタル社会で操作だけでなく、モラル等を含めて対人コミュニケーションとモバイルコミュニケーションのバランスの取れたコミュニケーション能力を備え、デジタルツールを使いこなす「デジタル成熟度」といった考え方を提唱することで今後のデジタルネイティブの教育に活かせるのではないかと思える。

一 世代間によるデジタル格差

インターネットを背景に、スマホをはじめとして

ゲーム機器を含めた情報端末機を何も携帯しない大學生はおそらくいないだろう。小学生や中学生は別にして、高等学校では学校へのこうした機器類の所持について制限しているところはあるだろう。いまやデジタルネイティブ（一九九三年以降に生まれた世代）は学校教育について言えば、幼稚園から大学まですでに存在していることになる。しかし、そこで教える教師はまさにデジタルイミグラントである。デジタルネイティブの親の世代は一九八三年のファミコン誕生以来、デジタル社会については比較的理解があり、また、仕事上においてはPC等をはじめとしたデジタル機器を使って仕事をせざるを得ない状況に追い込まれて来たというのが本音のところだろう。いわゆる理系出身者はそれほど苦もなく順応しているのに対して、文系やPC等に縁のなかった者にとっては死活問題でもある。

二 情報モラルのエアポケットの時期

一九九三年以降に生まれたデジタルネイティブの世代はファミコンやオンラインに代表されるゲーム、デジカメ、PC、インターネット、スマホ等を一見苦もなく使いこなしているように思える。これはあくまでも「思える」ということだ。何故なら、「使いこなす」とはどういうことなのだろうか。そうだけができるようになることだけでは、「使いこなす」とは言えないだろう。使用に伴うマイナスマ面やこれに伴う周辺のものを含めたものを理解することが重要であろう。アルバイトの学生がバイト先の冷凍庫で写真を撮り、また、線路内に侵入した写真をツイッターにアップしたことが契機に大きな問題となった。また、モラルに反するのかどうかも判断が難しいものもある。例えば、天皇・皇后両陛下が二〇一四年五月二十一日、東京発の新幹線で栃木県に入り、一泊二日で足尾銅山鉱毒事件にまつわる地域を視察

した時に、多くの人がスマホやカメラで両陛下の写真を撮ったが、女子高生がそれらの写真の中でツイッター上最も反響を呼んだことがあった。「小山駅に天皇陛下いた：ベストショット撮れた：」とアップしたもののだが、あとから大きな話題となり、ネット上を騒がせる事態となった。肖像権、人権侵害、表現の自由、非常識な行動など様々なコメント等が寄せられた。ここにはまさにインターネットの怖い部分凝縮されていると考えられる。

一 ベストショットを撮れたという気持ちとその写真をネット上にアップしたが、アップした本人が全く予想もしていないようなコメントが寄せられ、しかもそれが大きな話題となってしまう。

二 予想もしないほど大きな話題となってしまう、公開用のアカウントを非公開にしたものの、

アップしたコメントと写真はリツイートされ、今でもそれがネット上に残ってしまっていること。

公開することの意味を実は十分に理解していないところが問題のように思われる。インターネットへのアップは自分のアイデンティティを明らかにしないで行えるという大きな利点がある一方、責任感の欠如が誘発する危険性を十分に孕んでいる。投稿者の思いは概ね次の通りが多い。

- 一 いい写真が撮れたのでみんなに見てもらいたいという「承認されたい自己」がある。
- 二 自分が思っていなかったようなコメントが寄せられる、思っていた以上に反響が大きいと「こんなはずではなかった」と思い、アカウンントを削除する。

ここに見られる投稿者の心理は「予想以上にいい反響が出ればうれしく思い、思っていないコメントが寄せられると認められたい自己が実現できなかったと思うと同時に、「一種恐怖を感じる」といったところではないだろうか。しかも、コメントを寄せる相手は見えない存在であり、短いコメントが多く、この場合にはコメントを読むと冷たい印象を受けやすい。コメントを寄せる側に全く問題がないわけでもないが、自分のアイデンティティを明らかにせず、しかも見えない相手へのコメントともなれば、過度に気を遣わずにコメントする事例が多いのもインターネット特有の現象ではないだろうか。これもまた、広い意味で言えば情報モラルということになる。限られたグループ内での情報の共有でないだけに、投稿者がインターネットに写真をアップする本当の意味を実は理解していないということにつながる。

三 抑制か推進か

最近、小学生の携帯電話・スマートフォン利用の制限について話題となっているが、自分が中学・高校生の時にはファミレスなどもなく、マクドナルドも出店が始まった頃であるが、喫茶店等に出入りするのには「不良」といったことが学校では問題となり、そうしたところには出入りしないようにといった時代だった。今では小学生同士がファミレスやマクドナルド、ミスタードーナツで集まり、勉強していたり、ゲームをしていたり、マンガを読んでいる姿を見ることが珍しくない。誰も経験のしたことのない状態が現在である。親や教員が経験をしていなかったことを生徒・学生が先行して経験していること、親や教員には理解のできない事態が発生する。マンガやアニメについては、TVアニメ放送開始といった初期を過ごしていた世代が現在は親の世代となっており、すでに五〇年以上が経過していれば、

文化というレベルまでに進化している。その間にはマンガ／アニメVS勉強という構図があったことは言うまでもない。かつてマンガ／アニメで起こった現象が現在はデジタル機器、SNSといったものにとって替わられたということだろう。政府が号令をかけたIT革命は今やインターネットの導入やスマートフォン普及を見れば予想を超えるスピードで拡大したと言ってよいだろう。しかし、IT化、デジタル化を押し進めたのはよいが、マイナス面についてはあまり積極的に取り上げてこなかったといつてもよいだろう。新しいものが登場すれば必ずこうした功罪については議論が巻き起こることは当然のことである。

四 教育現場での情報モラル教育

IT革命、高等学校での情報科の必修化に伴い学校でのIT化は急速に進み、今やHPのない学校な

どないほどだ。電話よりメールの問合せなども当たり前の時代となっている。SNS (MAIL, TWITTER, BLOG, FACEBOOK, LINE) は当たり前になっている。しかし、利便性は進めるもののその負の部分への対応等についてはあまりにも放置の状態が続いている。

エピローグ

ここ数年、SNS上の不適切な書き込みや気になる内容のものがマスコミを始め、インターネット上で話題になることが多い。こうした書き込みが後を絶たないのは初等中等教育での情報モラル教育が機能していないのではないかと思われる。ICTを推進することに主眼が置かれ、負の部分に焦点を当て、SNSの功罪についての教育が充分でないという点とだ。しかし、SNS利用に歯止めをかけるべく、携帯電話やスマートフォンの利用制限が話題なるこ

とはあっても、正しい利用の仕方の推進、あるいはSNSの功罪についての教育現場での取り組みがようやく始まった印象がある。大学の教育現場でも社会へ送り出す前段階として、デジタル社会での教養教育として、職業教育としてSNSの利用については新しい視点に立って取り上げるべきだろう。課題となるのはデジタルイミグラントがこうした教育の中心になっていることだ。世代の交代の時期もあるが、デジタルネイティブ世代による教員・指導者によるSNS利用の教育が待たれるところだろう。